



誇り高き保育の場に

友松 あきみち

一、減っていく幼稚園教諭

土曜日の夜の講義をすませて帰宅する私は、いつも道すがら銀座か有楽町の街のあたりをかい間みて通る。夜の繁華街はこの頃は週末に限らず若い人々で一杯だが、土曜の夜ともなれば街は一そう華やかに若やいでみえる。すでに中年に入っている者には心動かされることもなくなっているが、そうした人々の群をみていると、たった今教室にのこして来た学生たちのことがよみがえってくる。夜学は教員養成所とは限らぬけれども、一日の保育を終えてなおこの夜を資格をとるために励んでいる人もいる。中には昼間の仕事につかれて講義の半ば以上も居眠ってすごす学生もあるが、大半は熱心に

耳をかたむけノートをとって来ていた。現場ですでに保育の手伝いをしていただけに、保育学のようにややかたい話であっても、これが生活の中で具体的に理解されていくのであろうか。これら学生たちに私のできる仕事は少ないけれども、この夜を何程かのことを伝え得た思いのこっていることが、華やかな街の中にあっても私に多少のやすらぎを与えているのかもしれない。

つい先日のこと私は或ることから、幼稚園教諭養成所の役員の先生方とゆっくりお話する機会をもった。話の内容は私立幼稚園との間にこれから先教員需給の問題を、どのように円滑にもっていったらよいかということであった。都会地の幼稚園では教諭の不足もまだそれ程に目立たないけれども、地方に行けばすでに深刻な問題に

なっていることは、文部省の教員需給調査（昭和三十四年度）をみても明らかである。昭和三十年には新規採用者は三八三名、退職・死亡者は二九四五名で、約千名程の増であったが、三十三年度は採用二九九九名、退・死三四四名と五百名近い減少となっている。しかもその採用者中の三十七％は助教諭であって、おそらくこれらの状況は今日とても好転しているわけではない。現に役員の先生方の将来の見とおしは、私共が予測しているより遙かに暗いものであった。一言でいえば「教師になり手がなくなってきている」ということである。そして養成所の定員はどうやら満たし得たとしても、生徒の素質は年々に低下しているという。或る先生は「志望の進学に失敗した落武者のたまりにも」なっているという。

私は教え子の顔をあれこれと思い描いた。中にはお話のように意志に破れて入って来た者もある。だが保育に専心しようとする意欲も強く、この道ひとすじに生きようとしている人もいる。教員になり手がなく明るい職場かいくつも待ちうけている今日であるだけに、私には誰もの努力が尊く思われてならない。全般的に言えば素質の低下しているところもある。だが、この人たちがこれからの幼稚園の現場をつくっていくのだ。私はこの夜を資格をとるためにせよ地道な努力を重ねている人たちが、一人も多く幸せになってほしいと保育界の成長を願わずにいられなかった。皆が幸せになるた

めには、幼稚園の教育と運営が明るい明日を持っていることでなければならぬ。それは幼い子どもたちと、子どもたちの家庭の一人ひとりの幸せとつながっているはずである。私は夜の電車にゆれながら、これから先保育の世界がどううつり変っていくであろうかを考える。

二、行きどまりの私幼経営

役員の先生がたとの話合いは当然、養成所を出た卒業生の初任給とかその他の手当、将来の保証など実際に生活上のことが話題になった。教員になり手が無い。素質が低下しているということは、たしかに給与の面で満たされることの少ないことが重要な一因であろう。教員の不足は幼稚園に限らず、また他の国々でもそのような傾向にあるようだ。諸産業の繁栄にくらべて、教員生活は経済的に満たされることは少ない。イギリスなどは男女の給与差をなくしたり、一たん退職した女子教員の出もどりを歓迎することによって、女教諭の増加をはかることに成功したと聞いているが、今日我が国の保育の場では低賃金であることを直ちに解決することはできない。試みに次に東京の私幼経理部で作成した私立幼稚園の一般経理内容を記して考えてみよう。

		収 入	
1.	選 考 料	20,000	500円×40人(年少組のみ)
2.	入 園 料	80,000	2000円×40人(")
3.	保 育 料	1,152,000	1,200円×80人×12ヵ月
4.	教 材 費	192,000	200円×80人×12ヵ月
5.	暖 房 費	32,000	400円×80人
6.	母 の 会 費	96,000	100円×80人×12ヵ月
合 計		1,572,000	
		支 出	
1.	公 租 公 課	—	
2.	会 費	3,700	20円×80人+1,000円(東私幼)10円×80人+300円(区私幼)
3.	水 道 料	10,000	
4.	光 熱 費	42,000	電気料, ガス料, 石炭料(暖房費)
5.	旅 費 通 信 費	66,000	電話料 36,000円, 郵便料 10,000円, 旅費 20,000円
6.	広 告 宣 伝 費	15,000	
7.	接 待 交 際 費	14,000	
8.	火 災 保 険 料	10,500	保険金額 350万円
9.	修 繕 費	20,000	
10.	消 耗 品 費	40,000	
11.	福 利 厚 生 費	40,000	共済組合費
12.	教 材 費	96,000	園 長 月 30,000円
13.	行 事 費	96,000	教 諭 2名 月平均 10,000円 20,000円
14.	図 書 研 修 費	18,000	助 手 2名 月平均 7,000円 14,000円
15.	雑 費	2,800	計 64,000円
16.	人 件 費	896,000	64,000円×14ヵ月(2は賞与)=896,000
17.	地 代 家 賃	72,000	(300坪 月20円)6,000円×12ヵ月
18.	借 入 金 利 子	—	
19.	専 従 者 給 料	—	
20.	家 屋 償 却 費	130,000	350万円÷27年(本造家屋償却定額による)
合 計		1,572,000	

この表の作成(昭和三十五年十月伊東祐政氏担当)に当ってとりあげた園の規模は二学級八十名定員のもので、保育料の月額を千二百円としている。他に教材費、母の会費を加えて総計千五百円とした場合の園の収支計算表であるが、これはあくまで東京の資料であって、一般の現状はおそらくこれよりはるかに下まわっていることであろう。支出面には園長教諭の給与並に家屋償却費などが出てくるが、新基準に到達するためとか、設備拡充の費用は殆んど含まれていない。この経営の中から教諭の給与を引きあげていくということは、なみ大抵のことでないことは誰しも気づかれることであろう。

これが私立幼稚園の姿である。定員を多少オーバーし、稽古場などの内職をしたところで倍の収入があげられるわけではない。その点公立幼稚園の場合は地方教育費の中から園諸経費の助成がなされているわけで、事情はかなり違っているけれども、実際には地方の

公幼の中にも低い給与に困っておられるところもあるという。このような低賃金はどうしたら是正されていくのであろうか。私幼の場合には先ず保育料の値上げが考えられ、日私幼としては昨年全国的にこれにふみ切ると同時に、一昨年から経営管理に関する指導者講座を数回催してその改善策をはかっている。

だが、一般商社のように原価計算とか経営合理化といったところで、教育事業は簡単に割り出しができるものではない。特に保育料の値上げには限度もあることであって、今後は国なり地方教育費の中から助成の得られることを真剣に考えねばなるまい。早急に解決できる問題ではないかもしれぬが、しかし解決しなければならぬ。

だがさて、志望者が減じたり、素質の低下を来たしているこの現状は、果して低い給与の問題にだけしぼられているのだろうか。教員養成の短大や大学となると、学校を出ても必ずしも幼稚園に就職するとは限らない。以前にもあったことだが、特に最近では他の社会に出ていこうとする気持の人が多くなっている。私も先だってラジオの録音機を下げた教え子の来訪を受けて、熱心な保育専攻者だけにと迷ったことがある。またつい最近自分の園に起ったことだが、学期途中で他の職場に転じたいという新任教諭の相談をうけて少々考えさせられている。

三、保母と教諭

もう何年前になるであらうか。諏訪で保育学会がひらかれた折のことであるが、才能教育についてのシンポジウムが行なわれたことがあった。私はその折りに講師の一人が不用意にもらした一言を、今なお印象も鮮やかに記憶している。それは、幼稚園教諭に対する社会人の身分観であった。今日幼稚園の現場の教師であることに誇りを抱いている人は少なくはないけれども、同時に世間に対する一応のひげ目を感じとっている人もいるはずである。講師の不用意な発言は、その意味で聴衆の多くに一種の恥ずかしめを与える結果になった。一瞬聴衆の間に息をのみ講師の発言に対して反撥し憤りの流れるのを、私も心をつめたくして感じとっていた。私自身として今日に到ってもなおこの時の記憶が消えないのは、一園長として時には心たじろぐことがあるからであらう。根をただせば、社会的な身分観に我が職を自ら低く置いているからである。

多くの幼稚園の教諭諸姉は、保母という呼称で呼ばれることを好まない。幼稚園と保育所の区別を知らなかったり、無頓着な人はごく当り前に世間の通念として使用していることだが、何故このように保母ということばが幼稚園の側で排斥されようとしているのだら

うか。所轄庁のちがいやら教育体系に入ったことがたしかに呼称を正確にする必要にもせまられてはいるが、理由は決してそればかりではなく、前述した身分観にも通じるはずである。

保育所の保育の立場に立って考えれば、保育という呼称は誇り高きものでなければならぬ。またそのように感じとり、胸を張ってその仕事に従事している先生方の多くいることを私も知っている。ただその同じ保育ということばがどこを変えていわれた場合に、意味することが異なって受けとれるということはどういうことであろうか。職業に貴賤のないことはお互い身にしみて感じとっていることであるが、このように書きつづつてみればやはり心重い帰着点に到達せざるを得ない。

幼稚園と保育所の区別とか一元化については、ここでは深くふれない。ただそれらのことも合わせて、保育の仕事の今日課せられている意義とその役割りについて、われわれ保育者をもっと自信をもって受けとってよいのではなからうか。その意味でまず教員養成の機関で幼稚園なり保育所の持っている使命を、もっと社会的に或いは歴史的に学生諸君がしっかり身につけてくるようにしなければいけないと思う。たとえそれがあやまりにせよ、今日なお保育と呼ばれることを嫌う人々が存在することは、幼児教育者としても本質的な使命感をうえつけられておらぬことによるのではなからうか。呼

称は何であれ、その仕事に自信を持ち立派に生きぬいていくことが、現場にとつては一番大切なことである。社会的な身分観も、お互いに努力し保育内容を高め、或る場合は学問的な業績を加えて一般社会に一人でも多くの理解者をつくっていくことであろう。

今年の六月に私立短大保育科の教職員研修会がひらかれており、そこでは教諭としての職業意識の確立についても議せられたと聞いている。保育者としての見識を高めていくためには単に教育課程を学ぶばかりでなく保育の原理も身につけていかねばならない。広い見解に立って保育界の現状を少しでも自分の力で前進させていこうとする教師が一人でもふえていくことを期待してやまない。

そしてこの場合我々が一日も早く是正していかなければならないのは、幼稚園そのものの構成体としての未熟さを打ちやぶっていくことである。まず園長にして然り、私幼はとりわけ企業としての運営のむつかしさを幾多内在しているけれども、何よりもお互いに教育者としての自覚に立って行動することが大切であろう。

(神田寺幼稚園長)